

# 地方創生×東北U I Jターンシンポジウム

— U I Jターンのリアル、東北の創造 —



経済産業省東北経済産業局では、国と地方が一体となりU I Jターンの仕組みづくりを進めるため、東北6県、人材バンク事業の各県地域コーディネート機関等（※）と「U I Jターン研究会」を立上げています。

そのキックオフとして、去る9月13日、東京交通会館（東京都千代田区）において「地方創生×東北U I Jターンシンポジウム—U I Jターンのリアル、東北の創造—」を開催しました。

生活環境・就業環境の変化が伴うU I Jターンは、その実現までに物理的・精神的なハードルが低くありません。シンポジウムでは、U I Jターンされたゲストスピーカーの経験談やU I Jターン者に対する調査結果などからU I Jターンのリアルに焦点をあて、また新たに身を置く社会の中で自己実現を成し遂げるためのシゴトの仕方、地域社会でのネットワークづくりなどについて議論しました。

（※） 「中小企業・小規模事業者人材対策事業（人材バンク事業）」では、各県に地域コーディネート機関を設置し、地域中小企業・小規模事業者の人材のニーズに対応すると同時に、東京・仙台をはじめ大都市圏に人材発掘の拠点を設置している。

## 開催概要

日時：平成27年9月13日（日） 14:30~16:00

会場：東京交通会館12F カトリアサロンB

主催：経済産業省東北経済産業局

協力：とうほく回帰1万人会議事務局

登壇者：今野印刷株式会社 代表取締役社長 橋浦隆一 氏

秋田プロバスケットボールクラブ株式会社 専務取締役 高畠靖明 氏

株式会社磐城高箸 代表取締役 高橋正行 氏

特定非営利活動法人遠野山・里・暮らしネットワーク 会長 菊池新一 氏

ジョブカフェいわて プロジェクトマネージャー 牛崎志緒 氏

ファシリテーター：東北大学大学院経済学研究科 教授 大滝精一 氏

コメンテーター：東北経済産業局 局長 守本憲弘

## —パネルディスカッションにあたって—

・今、東北のありようが変わってきている。東日本大震災後、企業セクターではプロボノと言われるボランティアのスタイルが広がり、NPO/NGO セクターでは起業家精神に溢れる人達が流入し、行政においても新しい発想による自治の仕組みが生まれるなど、新しい人の流れ・発想が東北の中で起きている。しかし、震災から4年半が経過し、また以前の東北に戻っていくのかどうか、今ちょうど分水嶺に来ている。

・U I Jターン者には、単に移住するだけでなく、東北の地域やコミュニティを変えていくためのイノベーター、つまりは新しい地域・発想・仕事を創っていくという側面も期待されている。

## —U I Jターン者から—

（Uターン） 今野印刷株式会社 代表取締役社長 橋浦隆一 氏

・家業を継ぐためにUターンすることになったが、なぜ戻ることを決めたかという、1番には仕事はどこでやるかより自分が何をやるかの方が大事だろうと思った。地元に戻って創業100年近くになる伝統ある会社をどれだけ自分が盛り上げられるか試してみたいと思った。

・創業やベンチャーだけでなく、古い会社の中にも隠れたすごいものを持っている会社があって、自分が入ってそれをどう活かすかという考えもあるのではないかと考えている。

・Uターンした当初に困ったのは、相談相手がいなかったこと。商工会議所の青年部への参加、大学の同窓会の繋がりで経営上の悩みを共有できる仲間が出来てきた。自らのそうした経験があって、今は、大学の後輩などでUターンして頑張っている若い人達を応援するために、勉強会を開催したり、地元経済界の重鎮の方々に引き合わせたりして、後輩たちの人脈づくりや自分のビジネスの価値に改めて気付かせるようなことをやっている。

### (Uターン) 秋田プロバスケットボールクラブ株式会社 専務取締役 高島靖明 氏

・人との縁でUターンすることを決断した。イベント興行やスポーツビジネスに携わってきた自分のキャリアを生かしたいと思い、ちょうど秋田でプロバスケットボールチームを立ち上げようと活動している人がいるのを雑誌で知って、自分から連絡を取ったのがはじまり。

・プロバスケットボールチームを立上げるため、最初は署名活動から始め、任意団体を立上げ、会社になってという過程を振り返ると、大事だったのは、人に知ってもらうこと、仲間をつくることだった。

・Uターン者ゆえに良かったことは、足引っ張りや、ネガティブな情報が自分の耳に入ってきづらかったこと。目立つ仕事でもあったので、必ずしも好意的な反応ばかりではなかった。ただ、会社が大きくなっていく過程において、地元ならではのネットワークを活かすことが県民球団としてのチームづくりには欠かせない。

・地域で仕事をしていく時に一番大切なのは、そのまちを知ること。地元を誇りに思えるような、そういう確認ができる場をスポーツの現場を通じて伝えていきたい。

### (Uターン) 株式会社磐城高箸 代表取締役 高橋正行 氏

・最初は特に志があったわけではなく、祖父が勤めていた造林会社にインターンシップのような形で入り、そこで林業の衰退を目の当たりにした。林業衰退の原因である丸太の価格下落を何とかしたいと、割箸に着目した。いわば成り行きで会社を設立することを決めた。丸太の出口全部を引き受けることは勿論出来ないが、一石を投じたいという思いがある。

・Uターンしてから心掛けてきたのは謙虚さと誠実さ。Uターンには、うまくいくタイプとうまくいかないタイプが確実にある。自分は実はうまくいかないタイプ。ただ言えることは、移住しようと思っている地域を自分が変えてやるなどと思って行くとダメ、きっと3年以内に戻ることになる。そこに居つく覚悟があれば、謙虚になったり誠実になったりする。あまり肩に力を入れないことも大切。

### —Uターン者へのアンケート調査結果について—

#### ジョブカフェいわて プロジェクトマネージャー 牛崎志緒 氏

・「岩手で仕事をする上で働き易いと感じること」として、岩手に限らない理由ではあるが、職場の人の人柄、首都圏から来た方は通勤時間・自然環境、Uターン者からは住み慣れていたのも安心感がある。

・逆に「働きにくいところ」として、寒い、雪が多いというのが非常に多かった。賃金が少ない、人手が少ないといった労働条件に関する理由も挙げられた。また、しがらみ、世間が狭く窮屈に感じるという意見も出ている。

・「Uターン前後での所得の増減」について、Uターンによって所得が減少した人が大半を占めるが、「Uターン前後での支出」が増えたという人もいた。その要因としては、車の購入、光熱費。逆に減った要因としては、食費、家賃。物欲が減った、物欲が食欲に変わったというコメントもあった。

・回答者から移住する方々へのアドバイスとして、「行ってみて分かったのだが岩手にも中堅・中小規模の優良企業がたくさんある、あまり視野を狭く持たずに情報収集をしましょう」、「生活・仕事の何に重きを置くのかも1度考えてほしい」、「岩手に来てゆったり過ごすこともいいが反安定志向でガツガツ取り組むことをお勧めします」と言ったアドバイスも。

#### ー東北のUターン先進地・遠野の取組みー

##### 特定非営利活動法人遠野山・里・暮らしネットワーク 会長 菊池新一 氏

- ・遠野は以前からUターンが多く、農業や起業するという意欲のある人が多い。
- ・Uターン希望者の多い遠野の悩みは空き家がないこと。団体では空き家紹介を行っており、市も空き家バンクをつくり空き家調査をして空き家自体はあるが、実際には売らない貸さないというケースが多い。
- ・Uターン希望者に対して、何で生計を立てるのかを必ず尋ねる。
- ・最近感心したのは、いずれは農村部に住みたいが、当面は遠野市内の市街地にシェアハウスを構えて、将来遠野に住みたい人たち何人かで家賃負担をし、そのうちに自分の住むところを決める、そういう仕組みをつくりたいという若者たち。
- ・移住には準備期間が必要。思い立って急に移住することはお勧めしない。地域の人たちと関係を築き、プロセスを経て移住した人たちは定着率が良い。
- ・自分が住むところを探すという行為は、逆に言えば、住まわれる側がこの人ならこの地域に住んで欲しい、というお互いに気に入ればという、見合い結婚のような側面もある。
- ・田舎にはいろいろなしぐらみがある。仙人暮らしをしたいという思いで来る人もいるかもしれないが、うちの団体ではとにかくこちらのしぐらみに引き込んでいくようにしている。すっかり一緒になってしぐらみの中でやっていくことの楽しさをわかってもらえた人が定着する。遠野にいる仲間とUターン者が一緒に活動しながら、いろいろな分野で遠野が楽しいという活動があることで、遠野は魅力的なまちに映ると思う。

#### ー地域企業へのUターン就職・転職についてー

- ・岩手県南にUターンの若者を多く雇用している企業があるのだが、そこの若者達が、Uターンした理由をその会社で働きたいからだと言っていた。
- ・地方にはユニークな中堅・中小企業がたくさんあるが、それがなかなかうまく情報として伝わってこない面がある。今は企業の規模だけで仕事をする時代ではない、チャレンジできて面白い仕事ができる中堅・中小企業がうまく見えてマッチングできれば、地方への人の流れが進むのではないか。

#### ーパネルディスカッションを振り返って、今後地方への人の流れを促すためにー

- ・東京から地方に行く（来る）ことに対して、東京で失敗したから田舎に来たのだというようなネガティブな印象を持つというのが、今の日本においては一般的な心理ではないか。「心理の壁」が非常に大きい。震災があってUターンが増えたというのは、「心理の壁」が一瞬消滅したのだと思う。地方に行く（来る）ことはネガティブではないという雰囲気はどうつくっていくか。
- ・Uターンしてからの相談相手、仲間をつくるための環境を受入側においてどう準備するか。地域の外側においては、地元の人が光を当てない人・事柄に外から光を当てることで、地元からも正当な評価を得られるよう、田舎のしぐらみから脱するための手助けができるのではないか。
- ・Uターン問題の考えるとき、あまり型にはめて考えるのではなく、今日の3人も3者3様であって、法則がそこにあるということではないと思う。
- ・都会で仕事をしている人にとっても東北にとっても、WIN-WINのダイナミックな関係をつくっていく。そし

て、東日本大震災では、日本の地方創生を先取りするようなことが東北の各地で起こっているが、大震災の余波ということではなく、私達の意思で前に進めていくことが必要。



### 同時開催イベント 「とうほく回帰1万人会議」

日時：平成27年9月13日（日）11:00～16:30

会場：東京交通会館12F カトリアサロンB

主催：とうほく回帰1万人会議事務局

（特定非営利活動法人プラットフォームあおもり、岩手県中小企業団体中央会、一般社団法人ワカツク、公益財団法人秋田県ふるさと定住機構、キャリアバンク株式会社、学校法人新潟総合学院）

後援：東北経済産業局、青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県

「地方創生×東北UIJターンシンポジウム」と同日同会場において、人材バンク事業の東北各県の地域コーディネート機関が企画する「とうほく回帰1万人会議」が開催されました。

とうほく回帰1万人会議は、「自分の力でとうほくを変えていこう、新しいとうほくを創っていこう」という人材が東北に1万人回帰したとき、創りたい社会のありかた」を描くという試みです。

トークセッションでは“世界に評価される東北のシゴト”をテーマに、UIJターン先駆者が東北地域の可能性について発信を行い、また東北各県の地域企業紹介ブース・創業相談ブース等が出展しました。



（写真提供：とうほく回帰1万人会議事務局）